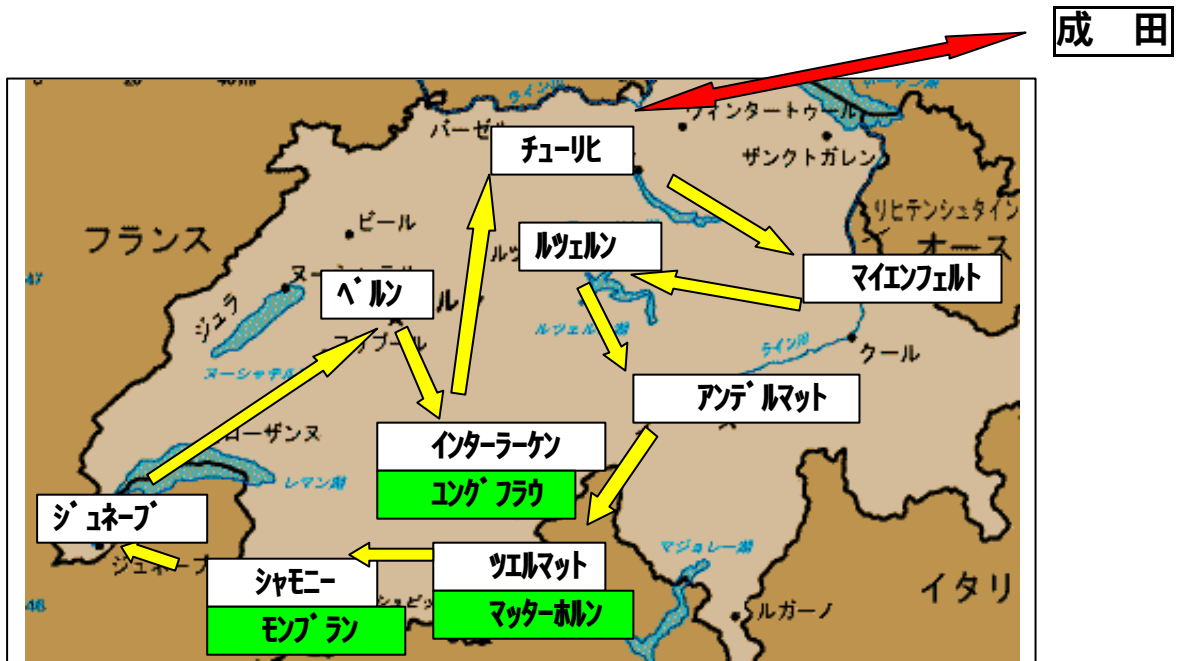


ス イ ス の 旅

(2005/6/29 ~ 7/6)

ニュージーランドのサザンアルプス、カナディアンロッキーにつづき、スイスアルプスのツアー（7泊8日）に参加した。カナディアンロッキーの旅はかなりハードスケジュールだったので、今回は余裕のあるツアーを選択した。マッターホルン、モンブラン、ユングフラウなどスイスの山を訪れる旅である。



第1日目： 成田 → チューリヒ（泊）

成田空港に朝8時に集合した。同行者は我々を含め33名である。男性は5名のみ、あとは50歳以上と思われる女性である。スイスは熟年女性に人気があるようだ。添乗員のNさん（ただ一人の若い女性）の案内を受け、出国ゲートに向かう。

スイスフランに両替（1フラン＝90円）したのち、スイス航空のチューリヒ直行便に搭乗する。フライトアテンダントに大学で学んだ独語で「ゲーテンターク」と挨拶すると、「コンニチワ」と笑顔で返される。定刻10時10分より15分ほど遅れ離陸、約13時間の飛行が始まる。



時差は7時間、スイスには午後4時着の予定なので、無理に睡眠をとる必要はない。図書館で借りてきた「地球の歩き方、スイス」で旅程のポイントを研究する。各座席には映画、ゲーム、音楽など好みのチャンネルを選択できるモニターがセットされており、機内のエンターテインメントは充実している。アクション映画とタイガーウッズのドキュメントを見たあと、ゴルフゲームやバカラを楽しんだ。その間2回食事がでたが、何を食べたか思い出せない。

午後4時過ぎ、チューリヒに到着する。簡単な入国審査のあと、バスでホテルへ向かう。空はどんよりと曇り、明日からの天気が気になる。10分ほどで郊外のホテル（Swissotel ZRH 右写真）に入る。今日の夕食はフリーである。相棒は長時間飛行に疲れたのか、食欲はないという。



近くのマーケットでピザのようなパンとフランクフルトソーセージを買い、次にビールを求めてうろうろする。棚に積まれたビールを見つけたが、冷やしたビールが見つからない。仕方がないので棚のビールを買い、ホテルの冷蔵庫に放り込んだ。スイスの物価は高いと聞いていたが、ハイネッケンのロング缶が200円と安い。海外へ行くと、日本の酒税がいかに高いかをいつも思い知らされる。

ビールが冷えるまでゆっくり風呂に入る。相棒はベッドに入ったままである。ソーセージをかじりながら一人ビールを飲む。テレビの番組はフランス語かドイツ語である。日本の衛星放送は受信できないようだ。各地の天気や山の情報にチャンネルをあわせ、明日の好天を祈りながら、ほろ酔いでベッドにもぐり込んだ。

第2日目：チューリヒ → マイエンフェルト → ルツエルン（泊）

バイキングスタイルのアメリカンBFをたらふく詰め込み、迎えのバスに乗る。相棒は指示通り景色の良い左側の席を確保している。市街を抜けると間もなく、車窓にチューリヒ湖が広がった。スイスでは現地ガイドがつかないため、Nさんはいろいろな情報提供に忙しい。説明によると、スイスの国土は九州より一寸大きいぐらいという。バスが進むにつれ、雲行きがあやしくなり、やがて雨が降り始めた。

「アルプスの少女、ハイジ」で有名なマイエンフェルト村に到着。家々の窓には花が飾られ、通りの景観は美しい。雨模様の中、ハイジのモデルとなった原作者の家を見学する。スイス名物、ラクレットという融けたチーズにじゃがいもの昼食を終えるころには雨も止む。次に案内された「ハイジの泉」

で写真撮影、岩にへばりついているのがハイジでアニメの印象とはほど遠い。



ハイジの泉



カペル橋



ライオン記念碑

再びバスに揺られ、スイスのほぼ中央にある街、ルツエルンに向かう。高速道路はよく整備され、新緑で覆われた山並を見ながら、快適なドライブが続く。ルツエルンに到着し、傭兵を祀る「ライオン記念碑」を見学し、木造の「カペル橋」を渡る。

すこし自由時間があるので、相棒とムーゼック城壁に向かう。敵の侵略を防ぐために築かれた城壁が残っており、上部からの眺望がよいとガイドブックに書いてある。しかし、登り口が見つからず、うろうろする。城壁の上にいる人にどこから上ったのか聞き、教えられた薄暗い階段を上るとルツエルンの街と湖が見渡せる城壁の上へ出た。集合時間が迫ってきたので、地図を頼りに下町の細い路地を通り抜けると、幸いにもその道は集合場所への近道だった。



ムーゼック城壁

バスで今夜のホテル(Hotel Europe)に到着。ルツエルン湖畔の四つ星ホテルだが、残念ながら部屋は湖と反対側である。一休みして、再びバスで街のレストランに向い、同行者とテーブルを供にするスイス料理の夕食となった。赤ワインを飲んだ記憶から、肉料理だったと思うが味は覚えていない。



Hotel Europe

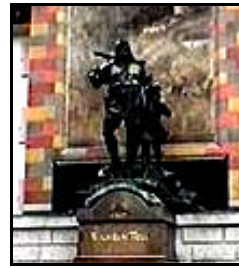
夕食を済ませたあと、同行者はバスでホテルへ戻ったが、我々は湖畔を散歩しながら帰ることにする。ホテルまで約1 km。夜8時を過ぎても周囲はまだ明るく、不安はなさそうである。しかし、歩き始めると雨が降り出した。カジノをのぞいたり、湖畔の並木を傘代わりにしたりして雨を避けていたが、本降りとなる。湖畔の休憩所でしばらく雨宿りし、小雨の中、ホテルに戻る。今日は雨にふられたが、明日の好天を期待して、....ZZZZZZZZ.....

第3日目： ルツエルン → アンデルマツト → ツエルマツト(泊)

目が覚めると、雨は止んでいた。朝食後、湖畔を散歩する。曇ってはいるが、

湖の向こうにリギ山やピラトスの山々が望まれ、美しい。

ウィリアム・テル



ルツェルン湖をバスの車窓から眺め、氷河急行の乗車駅であるアンデルマツトに向かう。途中「ウィリアム・テル」が活躍した村に立ち寄る。NHKの「名曲アルバム」で見た銅像前で記念写真を撮るが、像が大きく構図に苦労する。氷河急行の乗車まで時間があるので、山間の石造りの「悪魔の橋」でも途中下車したあと、バスは予定通りアンデルマツト駅に到着する。

サンモリッツから来た列車が山の上から下りてくる。我々が乗る列車は午後3時過ぎの団体専用車である。他のグループの人たちも列車の到着を待っている。しかし、列車は来ない。各ツアーの添乗員たちが駅員に列車の運行状況を聞いているが、情報は得られない様子である。定時運行車を優先するため、その合間を縫って走らせる臨時の団体列車は遅れるようである。

氷河急行



待っている間に駅の切符売り場でスイスフランの両替をする。田舎の駅だが、レートは成田より少しよい。1時間ほど遅れて列車が到着。しかし、我々に割り当てられた車両番号が見つからない。Nさんは駅員に聞いているが、うちがあかない。空いている車両に乗り込んだ。ダイヤの乱れで到着番線が変わり、窓に張った手書きの車両番号がホームから見えない状況となっていたのである。

アンデルマツトを発車すると列車はトンネルに入った。全長15kmのトンネルはフルカ峠を貫通しており、ドーバー海峡や青函トンネルなどの海底トンネルを除くと世界一長いトンネルである。トンネルを抜けると列車はアルプスの山麓をひた走る。駅で仕入れた缶ビールを飲みながら、車窓に展開する風景を楽しむ。相棒は向かいに座った同行者とのおしゃべりに余念がない。



3時間ほど走った後、列車はスイッチバックし、マッターホルンの麓の街、ツェルマツト（標高1620m）に到着した。すでに午後8時となっていたが、まだ明るい。しかし、マッターホルンは雲に隠れ、その姿は望めない。

この町は環境保護のためガソリン車の乗り入れが禁止されている。荷物は電気自動車で、我々は歩いて、駅から10分ほどにある山小屋風のホテル(Holiday) にチェックインする。

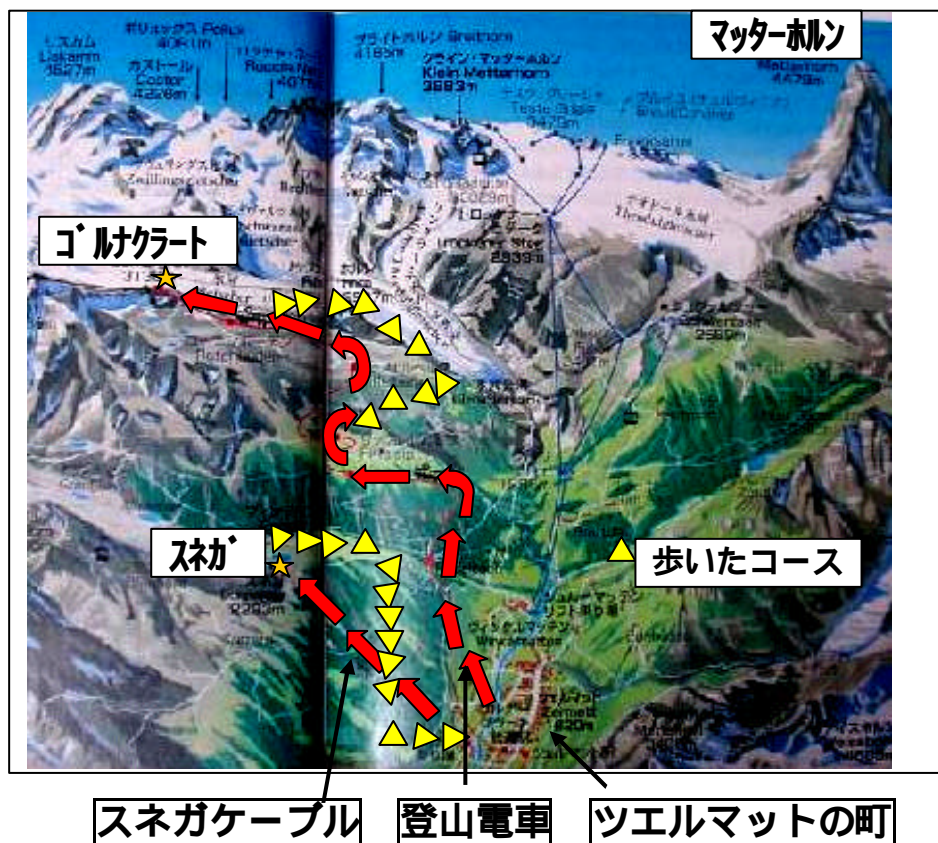
ミートフォンデュ
うまかった！

ホテルでの夕食はスイスの代表的な料理、ミートフォンデュである。鍋の熱油に串刺しにした牛肉を18(ニク)秒間？入れ、たれをつけて食べるというものである。赤ワインによく合い、思い出に残る味であった。しかし、鍋から肉を取り出すときグラスを倒し、ズボンにもスイスワインを飲ませるといった失態を演じてしまった。



第4日目：ツエルマット → ゴルナクラート → ツエルマット(泊)

今日はマッターホルン(標高4478m)鑑賞の1日である。朝早くベランダに出て山を見る。天気はよいが、マッターホルンの頂は雲に隠れたままである。朝食を済ませ、登山電車に乗り込む。上るに従い、絵のような景色が展開する。標高2000mの森林限界を超えると、お花畑が広がり、マーモットたちが遊んでいる。やがて電車は標高3100mのゴルナクラート駅に到着。高山病のせいか、少しフラットとする。無理をせず、ゆっくりと展望台へ向かう。そこには素晴らしいパノラマが広がっているが、マッターホルンの頂はまだ雲に覆われている。



記念写真を撮ったのち、同行者と別れ、相棒と一足先に、ローデンボーデン(標高2800m)へと電車で下る。ここからリッフェルベルク(標高2500m)までハイクする計画である。歩き始めてすぐに、逆さまッターホルンを映す湖に到着、しかし、頂は映っていない。アルプスの山並と可憐な花々を楽しみながら、のんびりとトレッキングを続ける。リッフェルベルクまで約1時間で到着、ここから再び電車に乗りツエルマットに戻るつもりであった。しかし、天気も良いし、次の駅、リッフェルアルプ(標高2200m)まで歩くことにする。コースは整備されているが、急峻な下りのため、足の指に力が入る。時々行き交うハイカーに「ハロー!」とか「ハイ!」とか挨拶しながら進む。森林限界に入り、木立を抜けるとリッフェルアルプの駅に出た。電車でツエルマットに戻る。



ツエルマット

山は雲に隠れていたが。。



[人と山の合成記念写真]

マッターホルンは雲の中

少々疲れたので、ホテルで昼寝をし、体力の回復を図る。午後3時、行動を再開する。マッターホルンを遠望できるスネガパラダイス(標高2300m)にケーブルカーで行き、歩いて下りてくる予定である。午後8時過ぎまで明るいので、道に迷っても大丈夫。全長がトンネルのケーブルカーは標高差700mの頂上駅までわずか3~4分で到着する。駅から50mほど下った湖畔からマッター



スネガ

ホルンを遠望するが、まだその全容を見ることはできない。犬を連れた女性が犬と一緒に湖で泳ぎ始めた。標高2300mであるが、日射しが強いので寒くないのだろう。ルツェルン湖でも子犬が泳いでいた。スイスの犬は泳ぎが得意なようだ。スイスの犬はスイスイ泳ぐ、なんちゃって!

お花畑を歩いていると、岩陰からマーモットが現れる。一瞬ではあるが、オコジョやリスも挨拶代わりに顔を出してくれた。テレビで見た光景が目の前に展開するのは実に楽しい。1時間ほど歩くと、ツエルマットの村が眼下に見え始めた。急峻な下りとなだらかな道との分岐点に立ち、なだらかな方を選択する。しかし、行けども行けども山の中である。少し、不安がよぎったところでツエルマットへの案内標識を見つけ、ホッとする。

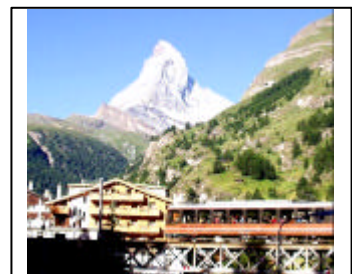
疲労のため足どりは重く、相棒も何とか最後の頑張りを見せている。人家近くの階段にさしかかり、マッターホルンを見上げると、雲の合間にその頂上が見え始めた。新田次郎が「坐した巨人」と感嘆した人気スポットの橋に着いたときには、雲は流れ去り、山はその全容を現した。今日一日の努力が結ばれ、その姿に感動する。



夕食はフリーとなっていたので、スイス料理の専門店に行った。日本の観光客が多いのか、日本語のメニューは有難かった。マッターホルンにビールで乾杯し、スープ、子牛の料理に赤ワイン、パンとパスタを味わった。疲れたが、今日は良い1日であった。

第5日目： ツエルマット → シャモニー → ジュネーブ（泊）

朝起きると快晴である。シャッターチャンス逃がしてはならじと、昨日乗った登山電車とマッターホルンを撮影できるスポットに急ぎ、デジカメに収める。



ツエルマットを出発する時、駅のキオスクで買った朝日新聞（5.6フラン）を見ると、我がタイガースはベイスターズに負けている。ああ。。しかし、星取り表は首位キープ、12の貯金を示している。出国前より増えている。よっしゃ、よっしゃ。。

バスはハイウェイを西に走る。はるか前方に雪に覆われたドーム状の山を見つけた。地図と写真でヨーロッパ最高峰、モンブラン（標高4810m）だと確認する。山頂は晴れており、期待が膨らむ。

フランスとの国境を越え、シャモニー（標高1000m）に到着。空には色とりどりのパラグライダーが舞っている。昼食のあと、ロープウェイで標高3842mのエギーユ・デュ・ミディ展望台へ向かう。70人乗りのゴンドラが12m/秒で山を上る。カールルイスもびっくりのスピードである。途中でロープウェイを乗り換え、山頂駅でエレベーターに乗り、展望台に到着する。眼前に望むモンブランの山頂は雪に覆われたお椀型で優しい感じだ。周りには4000m級の山々がそそり立ち、ごつごつした岩肌をむき出したグランドジョラス（4208m）は男性的である。そびえ立つ岩山に挑戦するロッククライマー達が目の前に見える。視界が良ければマッターホルンも見えるそうだが、今日は見えない。



大パノラマを楽しんだあと、ロープウェイで下山し、バスでジュネーブに向かう。レマン湖の大噴水（100m高）や国際機関の建物を見学後、中華料理の夕食となる。しかし、テーブルに運ばれる料理の味はいまいちである。プラスチックの皿、タイ米の飯など三流の料理にっかりする。ホテルにチェックインし、近くのCOOPでビールを買おうとしたら、夜九時以降、酒の販売はできないと店員に言われ、またがっかりする。



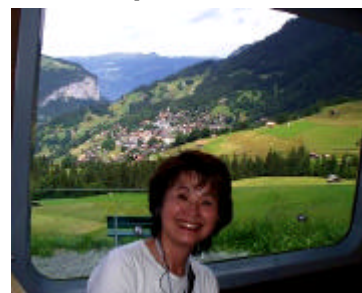
第6日目：ジュネーブ → ユングフラウ → インターラーケン（泊）

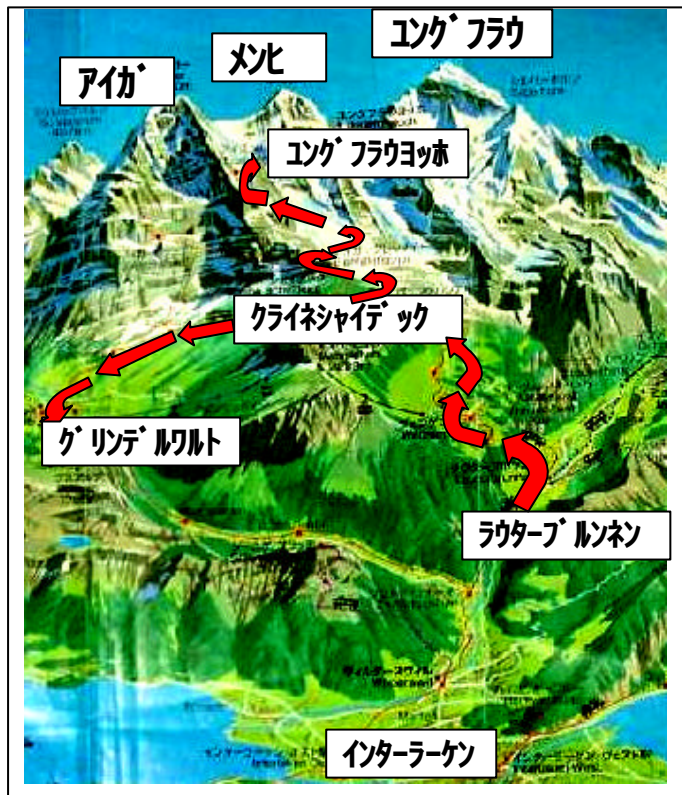
ジュネーブからバスはレマン湖畔を東進し、一路ユングフラウヨッホ観光に向かう。途中ベルンで小休止、世界遺産に登録された旧市街を散策する。登山電車の発駅ラウターブルンネンに到着し、発車時間までシュタウプバッハの滝を見学する。電車は山を上り、シュタウプバッハの滝を眼下にしなが、クライネシャイデックに向け走り続ける。今日も好天に恵まれ、車窓に展開する風景は素晴らしく見飽きることはない。

シュタウプバッハの滝



車窓





アイガーの北壁が見え始め、やがてユングフラウ、メンヒ、アイガー3山を見渡すクライネシャイデックに到着する。ここで電車を乗り換え、標高3454mのユングフラウヨッホ駅に向かう予定である。

乗り換え時間を利用して、レストランでの昼食となる。高山病対策として酒は控えた方がよいとの添乗員Nさんの注意を無視し、野菜サラダをつまみにビールを飲む。サラダを食べていると、野菜の陰からナメクジが顔を出し、皿の上をはいずり廻る。ウエイトレスにナメクジを見せ「このサラダ

はエスカルゴサラダか？」という、「オーノー！ 替わりを持ってきます」という。替わりを断り、つぎのメインディッシュを口にする。また「きしめん」のようなパスタである。スイスの主食はパスタと知る。ドリンク代の徴収にさっきのウエイトレスが来たが、ナメクジサラダの一件で私のビールはフリーとなった。

アイガー北壁

メンヒ



クライネシャイデック

昼食を終える頃から雲が広がり初め、アイガー北壁や山頂の見通しが悪くなってきた。クライネシャイデックから山頂駅までほとんどトンネルの中を走る。展望台に出ると山は霧雨に煙っている。案内板を見て、眼前にユングフラウとメンヒを確認する。山の谷間には氷河がせり出し、アレッチ氷河がスキューのゲレンデのように遠くまで続いている。その向こうはイタリアである。

霧のためだんだん視界が悪くなり、やがてアレッチ氷河は見えなくなる。

つぎにアイスパレスに向かう。氷河をくり貫いたトンネルは、床、天井、左右の壁、すべて青白い氷である。気温が低いため触れると、表面はすべすべである。氷の彫像などを見たあと、下りの電車に乗り込んだ。

クライネシャイデックで再度電車を乗り換え、アイガー北壁の真下を走り、グリンデルワルトに到着したときには、本降りの雨となった。旅行会社と提携するお土産屋に案内されるが、高いので何も買わない。バスで今夜の宿となるインターラーケンに向かう。ブリエンツ湖とトゥーン湖の間にある街(Inter-Lake)である。ホテル(Chalet Oberland 右写真)での夕食となり、魚(鱒)のムニエルと白ワインを賞味する。



雨はまだ降っているが、近くのCOOPに行く。職場の人へのお土産にミルクチョコレートを買う。板チョコが1フラン(90円) 日本で買うことは少ないが、値段は半額程度と思う。スイスでの買い物はCOOPがお勧めである。

第7日目：インターラーケン → チューリヒ → 成田（機中泊）

朝、5時に目が覚めると雨は止んでいた。相棒を誘い散歩に出かける。ブリエンツ湖とトゥーン湖の間を流れるアーレ河に沿って歩く。ミルクブルーの河水は昨日アイスパレスで見た氷河の壁と同じ色である。晴れていれば、山間にユングフラウが見えるはずだが、今日は見えない。駅のキオスクに寄り、朝日新聞を買う。スポーツ面を見るときは、小学生が通信簿を開ける時のような気持ちと同じでドキドキする。タイガースは首位安泰、ホッとする。

帰国はチューリヒ発の午後便なので、朝食のバイキングを十分とり、バスに乗り込む。2階建ての大型バスの車窓から田園風景を眺め、約3時間でチューリヒに到着する。搭乗券を手にし、残ったスイスフランで煙草を買おうとしたら、35フラン(3,150円)の値が付いている。日本で買うより高い。やめてチョコレートを買う。バッグの中はお土産のチョコだらけで結構重い。喫煙所を探し、成田で買った煙草の吸いだめをしてスイスエアーに搭乗する。



アーレ川



チューリヒ空港にて

機は予定通り離陸、成田まで12時間の飛行である。

シートベルト着用サインが消えたので、一眠りする前に本を読もうと頭上のトランクを開けた。バッグから本を取り出したとき、通路を隔てて座っている隣のじいさん(70歳前後)から「飛行中トランクを開けると物が落ちて、危ない」と注意された。変な“じい”と思いながら、「すみません」と言ってトランクを閉め、席に戻った。

一眠りしたあと、足を伸ばそうと通路に立ち、軽く屈伸運動をした。しばらくして、化粧室から戻った相棒に話しかけられた。隣のじいさんが「団体の方は通路で体操をするよう添乗員から指導されているのですか」と非難がましく言われたと。

変な“じい”は“ばあさん”と個人旅行のようで、団体客を小馬鹿にしたような言動である。マナーをわきまえぬ団体に悩まされた事があるのかどうか知らないが、こんな“じじ、ばば”には決して成りたくないというのが相棒との結論であった。

変な“じじばば”を無視し、ビジネスで東京へ行くというスイス人とアルプス旅行の話をしていると、機は7月6日の朝、時刻通り成田に着陸した。

比較的天候に恵まれ、スイスを満喫する1週間の旅だった。
機会があれば、もう一度行ってみたい国である。

(アウフピーダーゼーエン、ボンボヤージ、アリベデルチ スイス！！)